

同窓会誌

62



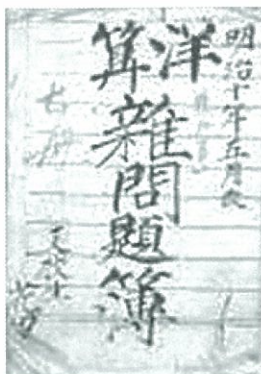
特集 **学校は今**

多忙感の中で教員は…

- ・アンケート調査と結果
- ・多忙感を軽減するために

母校 今昔

受講ノートと教案 — 毛筆から鉄筆へ



1) 明治10年
松江師範学校広瀬支校生徒ノート



2) 明治17年
松江師範学校生徒ノート



3) 大正期
西田村尋常小学校唱歌帳

年級	下校	教練	四教	既習	体例	非	平均	註	頭	教練	種類
	赤橋廣二				手帳用紙 手帳用紙	手帳用紙	手帳用紙	手帳用紙	手帳用紙	手帳用紙	手帳用紙
	藤野孝太郎	行進			手帳用紙	手帳用紙	手帳用紙	手帳用紙	手帳用紙	手帳用紙	手帳用紙

島根県第四尋常学校保健科教授室
大正九年二月五日 教授者 渡部寛一郎 執筆

4) 大正9年
西田村尋常小学校体操科教案

- 1) = 島根大学附属図書館蔵
松江師範学校広瀬支校は明治9年に開設、明治14年に廃止された。
- 2) = 出雲市立図書館蔵
「渡部氏」とは当時師範学校助教諭渡部寛一郎であろう。明治17年7月松江師範学校は島根県師範学校と改称された。
- 3), 4) = 島根大学附属図書館蔵
西田村は現在の出雲市万田町。3)の表紙に「島根県女子師範学校教諭立花先生校閲」とある。

— キーボードへ



5) 平成22年
島根大学教育学部 パソコンルーム (通称「金魚鉢」) の学生たち



目 次



巻頭言「環境寺子屋」のとりくみ黒田章義(2)

教育学部最前線

1000時間体験学修で何を身につけたか

教育現場から振り返る(4)

吉松敬恵・椛矢美紀子・伊東孝之・伊藤翔太・勝中恵美

特集 **【学校は今】**「多忙感の中で教員は…」(11)

アンケート調査と結果(12)

多忙感を軽減するために(18)

・梅津 益美 ・中筋 弘充 ・坂本 達夫

第4回島根大学ホームカミングデー(21)

教育学部・同窓会共同企画ラウンドテーブル

「教育学部の『いま』・教育の『いま』」(22)

ご退職の先生を送る(25)

支部からの声(26)

専攻だより —研究室はいま—(32)

平成21年度島根大学教育学部卒業論文題目一覧(61)

平成21年度島根大学大学院教育学研究科修士論文題目一覧(67)

ただいま活躍中!!(44)

近況報告

本部だより(47) 有志会・同期生会だより(49)

同窓のゆかりをたずねる—曾田篤一郎文庫ギャラリー—(60)

クリックしてね!—島根大学教育学部同窓会ホームページご案内—(3)

事務局より(3)(59)(69)(70)(71)(72)(73)

受贈図書紹介(43)(68) 表紙に寄せて・編集後記(74)

巻頭言



「環境寺子屋」のとりくみ

島根大学教育学部同窓会副会長 黒田 章 義

計らずも本年六月から本学部同窓会副会長を務めることになりました。もとよりその器ではありませんが、他の三名の副会長さんと力を合わせ田中笠一会長を補佐し、教育学部同窓会の進展のために微力を尽くしたいと念じておりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひいたします。

さて、島根大学、及び教育学部と関わりを持つようになって、これまでの日常と異にする新しい発見や出会いがあり、私自身の生活に潤いをもたらしています。その一つが、今回取り上げます教育学部環境・理科教育推進室の『環境寺子屋』のとりくみです。これは、島根大学が法人化された平成十六年度から教育学部が教員養成特化型学部として再生するための新しい試みで「一〇〇〇時間体験学修」と共に、今最も力を入れているとりくみです。

去る十月九日、第四回島根大学ホームカミングデーが新装なった松江キャンパス大学ホールで開催され学内外から多数の方が参集されました。総会では、今、若者の間で大変人気があり全国でご活躍の歌手浜田真理子さん

(島根大学教育学部卒業・松江市在住)の「音楽と仕事とわたくしごと」と題して、トークを交えた弾き語り演奏による特別講演がありました。生の歌声とそこに込められた若者の心情の表現に接し、楽しく充実したひと時を過ごすことができました。

そのあとで、各学部主催の催しがあり、教育学部では「教育学部の『いま』・教育の『いま』」をテーマにラウンドテーブルがありました。今回は、環境・理科教育推進室の高須佳奈特任講師による「環境寺子屋」の試みの提案と意見交換がありました。この背景には、いま静かに進行しつつある大学生の「理科離れ」があります。これは日本の将来を担う子どもに係る問題で看過できません。講師先生の熱気をはらんだ「自然、体験、ものづくりのネイチャーマイスターをめざせ！」「体験から学ぶ！自然科学、再発見」などのことがが参会者の胸に届きました。

今、目を輝かせている子どもの姿が学校で見えにくくなったと言われるなか、このとりくみがその救世主になることを願っています。